

海外ボランティアレポート

09-011-079 木村明日美

参加期間

7月26日～8月4日（10日間）

参加NGO

「国際協力NGOボランティアプラットフォーム」の活動受け入れ先、「NGO-PVN」

行き先

フィリピン マンダルヨン市 アディションヒルズ

費用

参加費 79,800円
飛行機代 58,730円
現地での生活費 11,000円
計 149,530円

主な活動

スラムへのホームステイ
スラムの子供たちとの交流
ファーストエイド
空手練習
フィーディング
マザーテレサ孤児院での手伝い
スモーカーマウンテン見学
市街見学

参加理由

まず私がこのボランティアプラットフォームに申し込んだのは、私がもともと海外ボランティアにとっても興味があり、将来は海外の困っている人たちを助ける職業に就きたいと思っており、学生であるうちに1度は海外ボランティアに参加したいと思っていたからです。

私は野球部に所属しており暇な時期がないので、4年生になって引退した後にしか海外ボランティアに参加するのは無理だと思っていたのですが、こちらの企画は自分の行きたい時期、行きたい期間で参加できるということで、テストが終わった直後から参加させていただきました。

感想

●出発からホームステイ先到着、諸情報

この企画は現地（フィリピン・マニラ）集合ということで、これが初の海外渡航であった私はとても緊張して、着くまでに何度もピンチがありました。しかし、機内や乗り継ぎの台北、台北からマニラまでの機内で、事あるごとにとてもいい方々に出会い、助けていただきました。とても運が良かったと思います。

フィリピンに到着し、受け入れ先の日本人・斎藤拳一さんと、もう一人ボランティアに参加中の日本人の方と無事合流した後、斎藤さんから説明を受けながらバスやジープを乗り継ぎ、換金をし、ホームステイ先に向かいました。

斎藤さんは日本で30歳くらいまで過ごし、空手やキックボクシングなどの多種の武道の有段者であり、フィリピン人の女性と結婚し、フィリピンに住むようになり、今は仕事のために単身赴任という形でマンドルヨン市のスラムに住んでいらっしゃる方です。簡単に盗みをしてしまうスラムの子供たちに礼節を教えるために、NGOを作って空手を教えています。空手を習うことにより、忍耐強さや礼節が身に着くだけではなく、ボディーガードなどの職にも就きやすいそうです。そして家を開放し、信用のできる子供たちだけの中に入れ、斎藤さんの家事のお手伝いをする代わりに食事を与えたりしています。斎藤さんは自分のお金を使って医薬品を買い、近所のスラムを子供たちと歩き回り、パトロールとファーストエイド活動を行ったりもしています。

これらの説明を受けている間にもマニラの風景がバスの窓から過ぎていき、とても不思議に思いました。斎藤さんの説明するスラムと、周りの風景が伴わなかったからです。バスの外は、日本の普通の町と同じ風景です。高いビルや大型ショッピングセンター、沢山の車やバイク。この国のどこに困っている人がいるのか、と説明を聞きながら思いました。しかし、よく目を凝らしてみると、市内を流れる大きな河に沿ってブルーシートのテントが並び、道の端にはストリートチルドレンと呼ばれる子どもたちがいました。そんな都会と貧困が混ざったような町を抜け、ホームステイ先のスラムにつきました。

斎藤さんはその町を、「13年くらい前に、フィリピンで一番殺人が多かったところ」「違うところに住む友人には、あそこに住んでいてよく殺されないね、と言われるようなところ」と説明してくださいました。私がおの場所に着いたのは夜でしたが、沢山の人が大通りにいて、斎藤さんにフィリピンの言葉（タガログ語）で挨拶していました。斎藤さんもそれにタガログ語で返します。大通りから少し細い道に入り、隠れ家かと思うほど細く入り組んだ道に入ると、いよいよそこはスラムでした。その人たちは斎藤さんを見ると、「マスター！

(日本語で空手の師範の意味) オス！」と話しかけてきます。斎藤さんが、「オスは空手をやっている人の世界共通の挨拶だ」と空手の生徒たちに教えたことが広まって、町の人たち全員が斎藤さんやその仲間の私たちのような日本人には「オス」という挨拶を使うようになったそうです。

細い道には野良犬、野良猫がそこらじゅうにおり、それらは決まってガリガリに痩せていました。細い道に沿って小ぶりの家が並んでおり、傾斜の多い迷路のような道を進んでいくと、大きな天井付きバスケットコートが現れました。フィリピン人はみんなバスケットボールが大好きで、昨年市長が建てたものだそうです。新しくきれいな黄色で、そこだけスラムではないみたいでした。斎藤さんの家はそのコートの外側の一角にありました。ドアや壁に青いペンキで「MASTER KEN KARATE...」と続く紹介文のようなものが書かれていました。私たちが部屋に入ろうとしたら、沢山の子供たちが集まって来て、一緒に部屋に入りました。10畳ほどのスペースが、一気に足の踏み場もないほどになり、斎藤さんから子供たちの紹介をされても、なかなか名前を覚えられませんでした。子供たちは日本人に慣れていて、今まで来た日本人に習ったのか、「せっせっせーのよいよいよい、アールプースーいちまんじゃーくー」と二人組で猛スピードの手遊びを見せてくれたり、日本のJポップソングを上手に歌って聞かせてくれたり、驚かされることばかりでした。向こうでは「お姉さん」というのを親しみをこめて「アテ」と呼ぶそうで、斎藤さんが私の事を「アテ・アスミ」と紹介して下さいましたが、「アスミ」というのが言いづらいのか、最初は「アテ・アソミ」と呼ぶ子もいました。「アソ」はタガログ語では「犬」という意味なので、みんな笑っていました。

●子供たちとのコミュニケーション、スラムの環境

子供たちは人見知りなく、抱きついてきたり手を繋いできたりします。男の子たちはシャイでありそういうことはありませんが、女の子たちは常に肌と肌が触れている状態でした。日本ではそんなにくっついている状態などないので、とても不思議な気分でした。人間の肌ってこんなに暖かいのか。人を自分の膝の上に座らせるとこんな重みがかかるのか。座らせどころが悪いとこんなに骨が痛むのか。人が隙間なく集まるとこんな空気が熱くなるのか。子供の手はこんなに小さくて、湿っていて、ツルツルしているのか。直接接して、初めて気付く感覚でした。

子供特有の強い独占欲はどこの国でも変わらず、一人の女の子と手遊びをしていると、すぐに違う女の子が「私と！」とその女の子を押しやって加わってきます。私は「順番だよ、次一緒にやろう」と言って追いやられてしまった女の子と手遊びの続きをして、その後で静かに待っている先ほどの女の子と手遊びをしました。兄弟でけんかを始めた子たちを「そんな強くやったらだめでし

よ、君はお兄ちゃんだから」となだめ、斎藤さんの家事の手伝いを頼まれたのにやらない子に「マスターのお皿洗いしなくていいの？」と促してみたり、除けものにされてしまっている子供を輪に引き込んだり。思い返してみると、私が子供達にやったことは、フィリピンだからこそとかではなく、日本でも普通に目にすることでした。これを考えてみると、途上国で貧しいからって極端に人格が違う、とか考え方が違う、などの偏見は全く当てにならず、言葉が違うだけで同じ人間なのだという当たり前のことを実感しました。

フィリピンと日本のハーフの友人にフィリピンの事を聞いた時、「日本の常識は通用しないから」と言われましたが、上記のように人間的には大した違いはありませんでした。ただ、環境は全く違いました。トイレは便座式でしたが、紙はなく、横に大きな水瓶に入った水があり、それでお尻を流すのです。お風呂場などなく、体を洗いたいときは、その便座に裸で座り、水瓶から掬った水を頭からかぶって水浴びをします。シャンプーやボディーソープも自分で用意すれば使えます。ただ、そのトイレもちゃんとしたドアがあるわけではなく、心もとないレールで止められている布で中が見えないようにしているだけなので、風が吹けばたなびきますし、その向こうの台所で子供がお皿洗いをしていれば布も動きますので、安心して体を洗えたことはありませんでした。

水は友人に「飲んでではだめだよ」と注意されましたが、今は整備されて水道水も飲むことができるそうです。ただ、家に水道はありませんでした。スラムのある家の壁から蛇口が生えていて、そこにタンクのようなものを持って行って汲んでそれを家まで運びます。この水汲みは子供たちのルーティーンワークです。休日はその唯一の水道も出なくなり、そんな日は水浴びもできません。マスターは普段水浴びを3日に1度くらいしかしないらしいのに、普段毎日お風呂に入る日本人のために、大切な水を私たちの水浴びのために割いてくださっていたからです。最初毎日水浴びをするのが当たり前と考え、何も考えず水浴びをしていた自分を考えると、申し訳ない気持ちになりました。

スラムの中には自宅を駄菓子屋のようにして物を売っている家が沢山あります。水道水を500ミリリットルほどで袋に入れ、冷やして売られている「ice water」(1,25ペソ)は私も沢山買いました。日本で売られているベビースターラーメンのような小袋が何個も続いているようなお菓子が沢山あり、それらは1袋1ペソです。私はフィリピンに来て1万円を換金しましたが、5500ペソほどになりました。最初は「少なくなっちゃった…」と残念に思いましたが、日本のパン屋さんで売っているような焼きたてのパン(タガログ語でティナーパイ)は1個5ペソ(10円)で、先ほどの1ペソは2円です。パンは、そこがスラムだということを忘れてしまうほど美味しかったです。私は、日本で売られているパンより美味しかったと思っています。斎藤さんが違う日本人を迎え

に行ったりして帰りが遅くなったりすると、私もお腹が減り、周りの子供たちに「Are you hungry?」と聞いてみますが、決まってみんな「No」と答えます。私が「I'm hungry. How about you? Aren't you hungry?」と聞いてやっと、微かに首を縦に振ります。私が日本人でお金を持っていることをわかっているのに、子供たちは物をねだったりしません。私が「I want to buy “ティナーパイ”。」と言うと男の子たちが「I will go with you. I'm a guardsman.」と言って手を繋いで案内しながらついて来てくれます。私が人数分買う時もお店の人がタガログ語で情報を聞いてくれて、買ったパンは自ら持ってきて、とても優しくて頼もしい子供たちです。

スラムに慣れてくると、とても気が緩んでしまいます。周りの人たちはとても明るく、日本人の私に「モシモシ〜?」や「コニチワー」と知っている日本語で話しかけてくれます。私が「Oh! Japanese!」と驚くと、とても嬉しそうにしてくれるので、私も少しタガログ語を覚えました。英語の「Nice to meet you.」にあたるタガログ語「イキナガーガラックコカヨンマキララ」を初めて会った人に言うと、大体「Wow! Can you speak philippino!? It's a very long word!」と驚かれます。スラムの子供たちの中でも小さな子供や貧しい子供たちは学校に行っていないので、英語が話せません。そのような子どもたちとコミュニケーションをとるために、「What is your name?」「How old are you?」にあたる「アノンパガーランモ?」「イランタオンカナ?」を覚えたことにより、名前や年齢を答えてくれるようになり、人に紹介されるよりもちゃんと言葉が通じる仲間として友達になれた気がしました。しかしやはりそこはスラム。夜になって私が一人で水を買うに出ると、子供が慌てて追いかけてきて、「Where will you go? Don't go out alone. It's midnight now! Here is dangerous!」と怒られました。昼間でも、可愛い犬を追いかけて私が家を一人で出て行ったときに子供たちが慌てて追いかけて来てくれました。子供たちや、私に話しかけて来てくれるような人たちが親切なので、そこがとても危険な場所だとは思えないのです。

しかし、家の前のバスケットボールコートでは、平日も休日も昼も夜も関係なく、いい大人たちがバスケットボールをしています。子供たちが水汲みの帰りにコートの端を通っていても、邪魔になれば大声で怒鳴ってきます。スラムでは職がなく、そのようなスラムの外に働きに出る気のない親の背中を見て育った子どもたちは親と同じように働かずずっとバスケットボールをしているような大人になります。夜中の12時でも、バスケットボールコートの床に野良犬と一緒に大人たちが寝転がっています。まるでストリートチルドレンの大人バージョンです。斎藤さんは彼らの前で平気で、家事の手伝いをしなかった子供たちを「そんなんじゃ、あそこで1日中バスケットボールをしているなら

しない大人になるぞ！」とタガログ語で大声で怒ります。たまに手も出します。しかしそこにはそのように怒ってくれる大人などいないのです。斎藤さんが怒らなかったら、今とても優しく良い子供たちも、あのようなニートになってしまうと思ったら、周りから変に思われようと、斎藤さんの行動は正しいと思います。「家事でも水汲みでも、何か手伝えば、食事がもらえたりたまにお小遣いがもらえたり、日本人のお兄ちゃんお姉ちゃんに優しくしてもらえてわかれば、働こうって気持ちになるでしょう。ご褒美がほしいから働くっていうその気持ちが大事なんですよ。あのニートたちはそんな気持ちもないですからね」と斎藤さんが言っていたのが印象に残っています。

●スモーキーマウンテン

スモーキーマウンテンとは、ゴミが積み重なってれっきとした山になったものです。その周りには私がホームステイしたスラムより貧しいスラムが幾重にも広がっています。海外の沢山のメディアがスモーキーマウンテンを取り上げたことによって、スモーキーマウンテンを取り締まっている役所は、「フィリピンは発展しようとして頑張っているというのに、なぜ発展した箇所ではなく、まだ手が行き届いていないここ（スモーキーマウンテン）を取り上げるんだ」と言って、市長の承諾を得たボランティア団体も、「何がボランティアだ。ここで何のボランティアをするんだ」と言って、入れてくれなくなったそうです。なので、私たちは山の周りを歩き、その子供たちにお菓子を配りながら山の様子を観察したり、山から拾ってきた物を洗っている人たちに色々聞いたりして歩きました。

山はスラムの入り口からでも見えるくらい高く、その上で人とショベルカーが動いているのも、ガスが噴き出して陽炎になっているのも、遠くからでもよく見えました。海外のメディアは、募金活動のネタにするためにこのような映像を撮っていくそうです。ゴミ山から袋を拾ってきて、川で洗い、庭で干し、ちゃんとした商品になった袋を庭に積み上げておく。これは、このスラムの中でも売り物が沢山ある家としてお金持ちの部類に入ります。しかし、ボロボロの家で、庭には沢山のゴミ（にも見える袋の山）がある風景を何も知らない海外の人が見たら、「可哀そうに」としか感じないと思います。しかしその家の住人は明るく笑顔で、その家をバックと一緒に写真を撮ってくれました。彼らの生活には、確かに衛生面や経済面でも問題はあるのかもしれませんが、それでも幸せそうに暮らしています。何も知らない人に「可哀そう」と思われるのは、彼らにとっては心外だと思います。

ここに住む子供たちは（私があった中では）例外なく学校に行っていなかったなので、英語が通じず、全く会話ができませんでした。しかし、お菓子を配りながら歩いているととても笑顔で近寄ってきて、お菓子を渡したら、お礼にと

お花をくれた子もいました。その優しさにこちらが何度もお礼を言ってしまうました。

●フィーディング

フィーディングとは給食活動の事です。500ペソ（1000円）で、フィリピンのお粥（お粥にチョコレートを入れ、甘いミルクをかけて食べる、フィリピンの一般的な食事）を大鍋2つ分用意してくれました。私が住んだスラムとは違う近所のスラムでフィーディングをやりましたが、そこもバスケットボールコートでした。子供たちは自宅から容器を持ってきて、私がお粥を掬って入れてやりました。私の住んでいるスラムではそうではなかったのですが、このスラムの子供たちは、お粥を受け取っても自分からお礼を言うことはありませんでした。斎藤さんの家に入入りしている子供（手伝ってくれた）が「お礼は!？」と促しても、お礼を言う子は少なかった。私はボランティアで1000円出しているのだから見返りを求めてはいけないと思いながらも、お礼がないのは気分も良くなく、フィーディング中の写真はふくれっ面ばかりです。しかし、必死に熱いお粥と格闘している私の見えないところで子供たちがお粥を頬張って笑っている写真を見ると、1000円出して良かったと思いました。成長期の彼らの健やかなる成長に少しでも貢献できたなら良かったです。

●物乞いの子供

斎藤さんの話で、とても印象に残っていることがあります。街に出て歩いていると、よくストリートチルドレンが「1ペソ頂戴」と手を出してきます。こういうとき、「癖になるのでお金をあげないでください」とボランティアプラットフォームのHPに書いてありました。しかし斎藤さんはその子供と少し会話した後、1ペソを手渡します。斎藤さんとボランティアプラットフォームは違う団体なので、考え方が違うのです。斎藤さんは、「1ペソなんて、日本円でたった2円だよ。癖になるからって2円を出し惜しみするなんて、ただの傲慢だ。彼らは癖になるもなにも、毎日1ペソ頂戴って言うよ。だってそれで食ってってるんだから。1ペソあれば、あの小さいお菓子が買えるし、子供だったらそれだけでも1日の飢えはなんとか凌げる。日本の戦後直後、親を亡くした子供たちがアメリカ兵に Give me chocolate. って言ってたっていうのは有名でしょ。その時にアメリカ兵は癖になるからってチョコレートを渡さなかったなんてことがあるか？そのチョコレートがあったから、今の日本があるんだぞ。ここは当時の日本と同じなんだ。」とおっしゃってました。その通りだ、としか思えませんでした。

これを考えるとき、善と偽善という言葉の意味がわからなくなります。この行動を「たった1ペソで、しかしそのたった1度だけじゃないか」という見方で考えると、この行動は偽善になってしまうかもしれません。しかし、私はこ

の行動は正しいものだと思います。

●終わってみて

海外ボランティアに行くにあたって、覚悟していたことがありました。向こうには沢山可哀そうな実態があるのだろう、というものです。もしかしたら、そんな「可哀そうな」状況の中で活動することによって「役に立った」という気持ちを味わいたかったのかもしれませんが。しかし、実際行ってみて、「可哀そう」と思ったのは、本当に暗い顔をして物乞いをしてきたストリートチルドレンの男の子に対してだけでした。スラムの子供たちも、スモーキーマウンテンのふもとの住人も、貧しいながらもそれぞれ楽しんで毎日笑顔で暮らしているのです。勿論改善すべき点はあります。スラムの大人たちの雇用問題、ストリートチルドレン、スモーキーマウンテンの衛生問題など。しかし、日本の常識や考え方にとらわれて、生活に踏み込みすぎて彼らの今すでにある幸せを壊してしまう支援は、もはや支援ではないと思います。私はやはり、将来そのように困っている人たちを助ける職業に就きたいと思っています。そのときには、改善すべきところと踏み込むべきじゃないところを見極められる人間になりたいと思います。

今回斎藤さんに出会えて本当によかったと思います。家族喧嘩になりながらも両親を説得して、参加したことは決して無駄ではありませんでした。